2 月第 1 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 2 月 4 日（日）10：30～11：30　降誕節第 6 主日礼拝
■説　教：　保科けい子牧師
■聖　書：新約：ヤコブの手紙 1 章 2～8 節（新約 p421）
■説教題：「　試練に出会うときは　」
■讃美歌：11「感謝に満ちて　み神をたたえん。」
　　530「　主よ、こころみ　うくるおり、」

本日与えられた御言葉はヤコブの手紙です。50数年前に聖書と出会ったころに、ヤコブの手紙は「行いによって義とされること」が強調されているので、宗教改革者のマルティン・ルターが「藁の手紙」と呼んで、あまり価値のないものとみなしたと聞きました。実際に読んでみると、なんとなく道徳的な勧めが羅列されているように感じられ、いくつかの心に残る御言葉だけを断片的に記憶にとどめたような気がします。しかし、今回「挨拶」と見出しのついている 1 章の 1 節の「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブが、離散している十二部族の人たちに挨拶いたします。」から、少し唐突に感じられるこの手紙の結びの5章19節,20節の「19わたしの兄弟たち、あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を真理へ連れ戻すならば、20 罪人を迷いの道から連れ戻す人は、その罪人の魂を死から救い出し、多くの罪を覆うことになると、知るべきです。」を通して読んでみると、少し違ったものが見えてきました。それは、プロテスタントの信仰に立つ者は、ルターがパウロの手紙から再発見した「信仰によって義とされること」を大事にすべきで、「行いによって義とされること」を主張するヤコブの手紙はその反対の立場にあるのだからあまり重んじなくてもよい、という私の中の先入観を大きく変えてくれることになりました。

ある方が、ルターがなぜこの手紙を「藁の手紙」と呼んだのかという理由とこのヤコブの手紙の価値について、次のように説明しています。「この手紙には十字架とか復活とか、血潮といったキリスト教の基礎的な事実が何一つ書かれていないからです。しかしこの手紙は、むしろそうした教理的なことを前提としながらも、むしろこの世においてキリスト者として生きる実際的な知恵について書かれているのです。・・・人が神に立ち返り、イエスを信じて救われるのは瞬時にして起こり得ます。しかし成長は瞬時には起こり得ません。成長するには時間がかかります。神の国においては、だれであっても、信仰者としての幼子から出発することを余儀なくされているのです。つまりすでに信仰によって救われた者がいかに成長し、実際的な生き方を身に着けるか、その実際的な知恵について書かれたものだとすれば、この手紙は価値のあるすばらしい書だと言えます。」そのように考えて、丁寧に読んでみると、確かにこれまであまり重要視して来

なかった一つ一つの御言葉に、深い意味が込められていることが見えてきました。

ところで、本日は教団の聖書日課にその箇所は取り上げられていなかったので主日礼拝の聖書箇所として選ばなかったのですが、１章１節の挨拶の中に大切なメッセージがあることが分かりました。それは、この手紙の著者は誰か、という重大な問題に関わるものです。かつては、「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ」と名乗っている著者は、主イエスの兄弟ヤコブだと思われていたこともあったと言われています。主イエスは聖霊によっておとめマリアから生まれましたが、そのマリアと夫ヨセフとの間には、主イエスの後に生まれた子どもたちがいました。主イエスの弟であるヤコブは、ガラテヤの信徒への手紙1章19節で使徒パウロが「ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。」と語っているように、初代教会のリーダーになりました。しかし、彼がこの手紙を書いたと考えるのには、時代的に無理があります。なぜなら、現在では、ヤコブの手紙はおそらく１世紀末から２世紀の初めごろに書かれた、と考えられているからです。そうしますと、初代教会のリーダーであったヤコブの信仰を受け継ぐ弟子たちの中からこの手紙を書いた著者がいると考えるほうが自然です。自分の師であるヤコブの名前をいただいて「離散している十二部族の人たち」に書いたと思われます。当時、イスラエルの民はすでに世界各地に離散していましたが、主イエスの死後、エルサレムから始まった教会に対する迫害によって、さらに離散にする人々が増えました。しかし、離散した人々がユダヤ人の会堂などを拠点として、福音を語り続けていったことを考えるならば、福音は困難の中で伝えられていったのです。そのような人々に対して、励ましの言葉を語ろうとしているのです。

本日の聖書箇所１章の２節、３節に「わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。3 信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。」と記されている背後には、まさにそのような当時の教会とそこに集う信仰者の姿があります。しかし、その試練とは現在の私たちの周囲にも存在します。能登半島地震では日本基督教団の教会も被災し、そこに集っておられる方々も被災しました。ご高齢の方が多いと聞いています。長年、信仰生活を送ってきてこれまでにないような試練に出会われています。我が家では、朝食の前に家庭礼拝まではいきませんが、聖書を読み「信徒の友」に載っているその日覚えられている教会のために祈り、それぞれに心に覚えている祈りをしています。私はもちろん立川教会に連なるお一人お一人のために祈り、最近は、能登半島地震で被災した方々や世界中で命の危険にさらされている方々のために祈っています。そのような中で、本日の5節の御言葉が本当に深く迫って来ました。「あなたがたの中で知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます。6いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい。疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の

波に似ています。」まず、主なる神様にいささかの疑いも持たず願いなさい、と著者は進めています。ここでの願いとは祈りということでもあります。けれども、そのことがどんなに困難であるかを私たちは知っています。私たちの心はいつも風に吹かれて揺れ動く海の波のようです。それでも、今日は一言でも祈ってみよう、明日になったらまた続けて祈ってみよう、といつでも新しくスタートしようと願うことができます。信仰者の歩みはそのような本当に地道で小さなものではないかと、私は思っています。そのような中で、いつの間にか「忍耐が生じ」、「知恵」が与えられて来るのではないでしょうか。ヤコブの手紙を「藁の手紙」と呼んだルターが「信仰によってのみ義とされる、救われる」という宗教改革の原理に到達したのは、一つはローマの信徒への手紙によってだったと言われています。その5章3節から5節に「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、4 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5 希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」と記されています。この御言葉の内容と、ヤコブの手紙の本日の箇所は、表現こそ多少異なりますが、ほとんど同じことを勧めているのではないでしょうか。使徒パウロが「信仰によって義とされる」ということを語った時に、それを表面的に受け止めて、信仰さえあれば普段の行いはどうでもよいと考える人々が増えてきた、と言われています。そのような風潮に対して、「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。」（1章22節）と鋭く指摘していると言われるヤコブの手紙の勧めを、私たちは真摯に受け止めてまいりたいと思います。